

昭和41年4月12日・第1巻第1号 発行
平成元年3月31日・第22巻 発行

——(財)日本学校体育研究連合会機関誌——

学校体育研究

第22巻

平成元年3月

財団法人 日本学校体育研究連合会

目 次

1. 巻頭言 学校体育研究の方法	会長 大石三四郎	1
2. 講演 これからの学校体育	同志社大学教授 岡 仁詩	2
3. 生涯スポーツをめざした学校スポーツのあり方	理事長 浅田 隆夫	6
4. 授業研究		
(1) 小学校の部		
ア 一人一人が課題を持ち、意欲的に活動するボール運動学習の追求		10
	愛媛県松山市立石井東小学校	
イ 「意欲と楽しさにあふれた体育学習」一人ひとりを生かすボール運動を通して		15
	秋田県本荘市立鶴舞小学校	
ウ 一人一人に「自ら学ぶ力」を育てるにはどのように指導していけばよいか		20
	島根県出雲市立今市小学校	
(2) 中学校の部		
ア 格技(柔道)指導の推進と健全育成		25
	東京都武蔵村山市立第四中学校	
イ 一人一人が意欲的に取り組み、確かな技能の向上をめざす学習指導の展開		30
	宮崎県宮崎市立宮崎西中学校	
5. 功労者の提言		35
私とスポーツ	広島市立天満小学校 校長 益 英雄	35
経験から得た「長寿」への道	豊中市立原田小学校 校長 吉岡 慧	35
6. 生涯スポーツをめざす新しい学校体育を求める千葉大会のご案内		36
	千葉県実行委員会会長 鈴木 純也	

学校体育研究の方法



会長 大石 三四郎

学校体育の研究をここで体育授業の研究と限定すれば、これほど難しい研究はない。しかも授業は1回生起の事象であって何回も繰り返すことは実際には出来ない。そこで事前にあらかじめ授業中に生起することを予想して教案なるものをたて授業を実施するのである。しかし、あらかじめ生起することを予想して、と言うが、これを観念的に予想するわけではなく、本来なら対象者について授業直前の能力調査に加えて、その他、関連の実態調査を詳細にしなければならないのである。さて、理想はそうであっても実際には多くの授業時数をもつ教師にとっては不可能に近いことである。そこで、経験とか他の関係資料を参考にして教案を立案することが一般である。そして教育が「文化の伝達」をその目的の一つにしている以上授業内容に含まれている文化財はできるだけ正確に余すことなく伝えなければならない。言葉を換えていえば、例えば教材をスポーツにとればそのスポーツ種目の歴史はもとよりスポーツの実技に関連しての多くの今まで研究された文化財を児童・生徒にどのような方法で伝達するかということである。しかも膨大な文化財を被教育者の其の時の能力と理解力に合わせたかたちにしなければならない。また文化財としてのスポーツ実技の理論は理論であるがこれを児童・生徒の心身の受容能力に合わせるだけでなく、その内容を教育を受ける児童・生徒の発育の状態にあわせなければならない。しかも、その児童・生徒の受容適期を選ばなければならないし、これは多くの者を相手とする授業では一言に言って大変なことと思う。しかし困難だからといって放任するわけにはいかない。だが現実には教師が殆ど何もしなくても、不思議といってもよいほどに、極く自然にボールを子供の真ん中に投げれば子供はサッカーでもなんでも今までの見よう見まねで覚えたことをやり始めるのである。考えて見れば学校体育研究は教師が理論的に組み立てたものの創作活動の中と言うより、極論すればむしろ、この様な若い人の自然の活動の中から学校体育研究の理論が生まれる究極の契機があるのではないかと、いってよいように思われる。それに体育授業にはこの他、文化財の伝達ということだけでなく児童・生徒そのものの心身の健全なる発育・発達を正常な状態で進めるといふ体育本来の目的がある。例えば、バレーボールを実施している時に、どこの場面でのどの様にして生徒の体力(生理学)を付けるのかと考えたり、気力(心理学)をどのようにして付けるのか、どの機会を利用するのか、または楽しさ(社会学)をどうやって感じさせ、交遊のクサビとして定着させるのかともなる。しかも、この頃日本人の寿命が延びたからといって生涯スポーツということを教師は自分の頭の中におきながら(福祉)児童・生徒が老人になった時に役立つことを考慮に入れて親切に教育するのである。

このように考えてくると体育授業は誠に荘大なる人間に対する長期的視野にたった総合教育プロジェクト研究の一つの分野であるともいえる。言葉をかえれば巨大なる時間・空間の拡がり(ヒロガリ)をもった学際的総合教育のプロジェクト研究の一つなのである。

講演



これからの学校体育

同志社大学教授 岡 仁 詩

○私のスポーツ観

スポーツはすべてすばらしいものであるといわれるが私はこのことについて疑問を持っている。スポーツはその扱い方によってどうにでもなる。技術の下手なものはチーム内で疎外されてくる。楽しいはずのスポーツで劣等感が生まれてくる。昔は野球で下手な者はライトを守らされた。バレーボールでも下手な者はボールに触れさせないように他の選手が動くため下手な者はボールに触れる機会が非常に少なくなる。ここで疎外感が生まれてくる。スポーツにはこんなこわさがある。チャンピオンシップを目指すスポーツにおいては技術が向上しないもの、下手なものは落伍していくしかない。上手なものだけが残っていく。学校スポーツは形態は同じでも中味の違うものでなければならない。スポーツが教育的でなければならないのである。しかしスポーツそのものは必ずしも教育的であるとは言えない。世間では簡単にスポーツ選手は良い人間だと考える。実際はスポーツを行うことによってその中からどういうことを身につけたかということが最も大切なことである。スポーツそのものが良いか悪いかということは、その接し方で変わってくる。学校スポーツにおいてはそのあり方が大切である。

○日本の学校体育の流れ

日本では、身体運動が学校に体操という名称で入って来た。デンマーク体操、スウェーデン体操、ドイツ体操などが中心になっていた。これが当時の時代的要求としての強い兵隊をつくることに応えていたが要するに体操であった。イギリスのパブリックスクール（特にラグビ高が有名）では課外活動として、スポーツを生徒が自主的に実施するようになり初めて教育の中にスポーツが取り入れられた。これが日本の学校教育の中に導入された課外活動として実施されるようになった。第二次世界大戦後より体操の時間が体育の時間となり多くのスポーツが体育の授業の中に取り入れられて実施されるようになった。

○学校体育とスポーツ教育

現在の体育の授業はスポーツが中心となって実施されている。体育は身体を通しての教育（Physical education）と考えられてきた。しかし最近ではSports education・education in sports・education about Sportsが強く叫ばれるようになってきている。スポーツを通じての教育、スポーツの中に教育がある。スポーツを行うことによってどのように教育するかという形でスポーツ教育を学校の中で考えていくことが必要であるというのが世界中の流れである。日本でもこの方向が教科教育法の中に示されている。

○同志社大学のラグビー

同志社大学のラグビーは自主的なラグビーを行っているとマスコミなどで報道された。外国では自主的という言葉が見当たらない。敢て言葉で言いあらわす必要がない程彼等の生活が自主的なのかも知れない。ドイツでは第二次世界大戦後学校にスポーツを取り入れるに当たって最初に言われたのは自立で

ある。従ってチームスポーツを行うことは好ましくないとされた。スポーツの中で作戦を考えることはいけない。個人技を表に打ち出して個人の力を高める指導を重点的に行った。チームスポーツを進めるためのチームのあり方や作戦を表面に出すことはいけないということから出発したといわれている。日本では最近自主的なスポーツということが強く言われるようになった。現在、日本のラグビーの中で犠牲的精神が非常に尊いものと言われるが、私はラグビーの中に犠牲というものはないと考える。また社会においても犠牲のあることはいけないと思う。ボランティア活動においても犠牲があってはならない。犠牲の上に成り立つようなボランティア活動をすることによって人間として、個人として私は奉仕活動をしたという満足感は何ものにも変え難いもので、それを得ているのであって何も犠牲になっているわけではない。ラグビーのパスの場合でも今自分が犠牲になってパスをする、犠牲になって倒れてボールを後に出す、などというがそれは犠牲ではない。それを犠牲という言葉で美化するところに恐さがある。私は戦中、戦後の激動の時代「昭和」を生きてきた。学生時代も学校制度が目まぐるしく変わった。しかし神国日本であるとか、聖戦であるとか言われたことが昭和20年8月15日の敗戦を境にして、今までのことは間違いであった 今まで教えたことは嘘であったと言われた。私たちは一体何を信じたらよいかわからなくなった。その後自分の生活の中で全体主義教育のこわさ、おそろしさをつくづくと感じた。私は自分自身の体験の中から全体主義志向への強い抵抗感が生まれた。しかし日本人は全体主義でまとまる傾向が強いのか、チームを見ているとそれがないとうまくいかないことを感じることがある。このことが良いのか、悪いのかははっきり見極めないと流される気がする。要するに個人というものが本当に大切にされる世の中でなければいけないと思う。だからラグビーの中で犠牲という言葉が使われるのがいやである。そしてラグビーを分析すればその中に犠牲はないのである。チームプレーではチームワークが必要であると言われるが、これは個人個人が自分のチームが得点するために自分の役割りをよく認識しその責任を遂行する。これがチームワークである。初めからチームワークがあるのではない。目的に向かって自分の置かれた立場でその役割りを果たすことによって本当のチームワークが生まれてくる。そこで当然ながら個人の力が大切になってくる。しかしチームプレーでは、作戦が先行し、そのためにチームが先行し個人が埋没してしまう。チームがあって個人があるのか、個人があってチームがあるのか二つの考え方があって私は個人があってチームがあると考えたい。チームがあって個人があるという考え方も決して間違いではないと思う。しかしチームのためにやるんだ、だからあなたはどうなさいということ、個人が非常に小さいものになってしまうということになるならば、これは恐いと思う。スポーツを教育として考えるならば、そんなことをしては、チームのためならず足を引っばることになるとして指導するよりも、目的に向かって今の立場で何をなすべきかを考えさせるのが大切なのではないか。

○自主性とラグビー

本年度ラグビー日本一になった神戸製鋼チームには監督はいない。選手たちが自主的に進めている。また学生日本一の大東文化大チームの監督は選手の自主性を重じたのびのびしたプレーをさせて成功した。高校日本一になった大工大高、茗溪高とも試合中のハーフタイムに選手の前に監督が出て来ないで選手自身でゲームを行わせていた。このように本年度日本一になったチームは皆選手個人個人が大事にされたチームであった。ラグビーは自主的でなければできないものである。試合になると監督はスタンドから見ているだけで何ら選手に指示を与えることはできない。選手自身でゲームを組み立

て進めて行かねばならない。従って日頃の練習や、日常の生活の中で自主性が養われていなければゲームの時に非常に困る状態が起きるわけである。だから日頃の練習や日常の生活の中で自主性を養う環境をつくらなければならない。同時に知らないことは教えなければならないし、やらないことはやらせるようにしなければならない。またやったら続けさせる。やらせることはやらせるが何でもやらせるわけではなく、自分たちでやれる環境を作ってやり、その環境を少しずつ大きくしていくことが必要である。

○私とラグビー指導

私は45年前からラグビーに親しんでいる。その間大きな試合を経験したり、同志社大学のラグビーをコーチして優勝したり、オールジャパンを率いて外国に遠征して指揮をとったりして、いろいろな経験をしたし、外国の書物も読んでいたりしてラグビーに関するいろいろなことを蓄積することができた。それを凝縮して、そのエッセンスを学生に4年間で教えようとする学生の中には一杯になってしまう。その結果よい結果を得るかも知れない。しかしそれは私、岡のラグビー以外の何ものでもない。プレーする者の創造がそこから生まれて来る余地がない。教え過ぎることによって選手たちの持っている能力を殺す場合があると思う。選手の知らない基本をしっかり教えて、(教え過ぎないで)選手の創造性によって選手自身のものを生み出してくるように環境を整えることが必要である。選手自身に考えさせることが必要である。基本はゆっくりと、繰り返し行なうことが大切である。野球における千本ノックは基本技術を習得するための練習ではない。からだがかへへとに疲れたときは正確な動作はできない。従って悪い癖がつきこすすれ、正しい基本技術を身につけることはできない。千本ノックなどという練習はボールに対する執着や何くその精神を養うのには役立つが、正しい基本技術やへばりに耐える体力をつけるためには無用のものであると思う。

○学校スポーツが目標とするもの

学校スポーツでのトレーニングには生徒は嫌がってついて来ない。学校スポーツは、からだを鍛えるためにスポーツをするのではない。スポーツは楽しいものであることを生徒に植えつけるべきである。その結果としてからだを鍛えられる、これが学校スポーツで求められているものではないかと思う。

○ニュージーランドのコーチに教わる

同志社大学のラグビーはニュージーランドのコーチを招いて指導を受けているが彼が最初に来たとき、モールプレーの練習はゆっくりさせなさいと言って指導した。これを見たOBたちはこんなダラダラした練習をしては今年の同志社は駄目だ。もっとビシビシやらなければと嘆いた。しかしこの年同志社は優勝した。このコーチはどうして速くやるのですか、ゆっくりやってもできないことが、速くやることができるはずがない。ゆっくりやってもしっかり身につけることが大切ですよと教えた。基本の大切さと、それを身につけるためにどうするかという技術の指導とスポーツに対する考え方ということになる。

○形にはまらないスポーツ指導

スポーツは楽しくなければならぬ。スポーツは本来楽しいものである。子供たちには先ずそこから導入されるべきである。そしてその中に創造的なものがなければならぬ。私たちはどうしても形にとらわれ勝ちである。野球は9人でなければならぬ。ラグビーは15人でなければならぬなどといった考え方に固定され勝ちである。スポーツが発生した時は現在の形ではなかった。もっと新しいものが生まれてきてもよいはずである。ラグビーでは少年ラグビーは9人、中学生のラグビーは12人で行うことを考えている。ラグビーが他のボールゲームにないことは、ボールを持って走れることである。ラグビー

はボールを持って走れるから面白いのである。しかし作戦などが先行するためにキックしたり、押し合
いをしたりする場合が多くなるが、本来はボールを持って走るといふことに、いっそうの喜びがある。
これは子供から大人まで共通したことである。ある幼稚園で小形のラグビーボールを子供に与えて見て
いると、やはり子供は最終的には自然発生的にボールを持って走り出し、壁にボールをつけて得点する
ことを考え出した。

形にはまらない教育、創造する環境が必要である。そしてそれができるのが学校スポーツではないか
と考える。

これは昭和63年度奈良県学校体育研究大会における、同志社大学教授 岡 仁詩先生のご講演（演
題「これからの学校体育」）を、奈良県の籠谷光雄・西川清正両先生が記録されたものを、岡先生のお
ゆるしを得て概要とし、更に先生に手を加えて頂いたものです。

なお、岡先生の略歴は次の通りです。

昭和4年11月10日生まれ

同志社大学経済学部卒業

現在 同志社大学文学部教授

ラグビーの日本高校・日本学生・日本代表チームの監督、団長として海外遠征

前 日本協会強化委員長

現在 日本ラグビーフットボール協会理事

同志社大学ラグビー部部長

生涯スポーツをめざした 学校スポーツのあり方



理事長 浅田 隆夫

序

1965年、生涯学習の必要性がユネスコの社会教育課長 ポール・ラングラン (Paul Langrand) によって提唱されたことは周知のことである。その理由として、彼があげた要因は次の9項目である。

1. 社会変化の急速化
2. 人口増加
3. 科学技術の急速な進歩
4. 政治への全市民の参加
5. 情報伝達の発生
6. 余暇の増大
7. 生活様式や人間関係の変化
8. 身体についての考え方の変化
9. イデオロギーの危機

これはすなわち、今日のような激しい社会変動に伴ない、価値観までが変質を来し、そのために老人から若者への教訓が必ずしも有効ではなくなり、むしろ逆に、老人自らが新しい環境に適応するために、新しく学習しなおさなければならなくなったことを示唆している。

元来、学習は、個人が自己実現を拡大・発展させていくことであるから、年齢や場の条件を限定する伝統的な学校教育では、もはや充分応えることができなくなったことをも意味している。

したがって、生涯に亘つて自己実現を可能ならしめるレカレント・システムによる教育方式が、主体的な人間の生き方にとって新しい生活の学習原理として確認されるようになった。思うに、これに応じる生涯学習のシステムづくりは、一方では行政・施設・方法の適時的かつ水平的な統合と、他方では個々人の発達の各段階に即した継続的・垂直的統合を計ることによって可能となるであろう。生涯スポーツもまた然りである。

1. 生涯スポーツ

(1) スポーツと発達課題

スポーツは、それ自体のもつ楽しみや喜びを体で味わうことであるといつてよい。これは当初、学体育でいわれたスポーツを楽しく行うために、いろいろ工夫を凝らし条件整備などして活動を活発にしたり、また、体力を向上させスポーツの技能を修得させるように指導したりすることとは違って、スポーツそのものに含まれている楽しさ、喜びを味わうことにねらいがおかれることを意味している。つまり、スポーツを手段としてスポーツの効果や結果を期待するのではなく、スポーツすること自体が目的におかれているのである。

また、スポーツを個人とのかかわりでいえば、スポーツは食事や睡眠などと同じく、心身の新陳代謝として必要なものであり、生体のリズムにより動くことの爽快さ、心身のレクリエートなど、個体としての生命維持やクオリティライフに不可欠なものでもある。また、スポーツは実際にやってみないとわからないといった未知の自己との出遭いや発見の機会ともなる。

さらに、社会との関連でいえば、スポーツは現代に生きるすべての人々にとって普遍的必須的事

項として生活になくはならないものとなった。

かくしてスポーツは、学校では個人の知育・徳育・体育と、社会では社会的文化的活動とかかわって人間の全人格的な発達と統合に寄与するものとなり、特に今日では余暇の生きがいとして主体的に自己実現を計っていくことに、スポーツは欠くべからざるものとなった。

にも拘らず、子ども達は社会では大人が企図した教育システムに乗せられ、そのもつ発達課題を健全に充足させることができず、期待される自らの発達課題を保障されない状況下におかれている。このことを考えると、学校におけるスポーツ教育は以前にも増して主要されねばならない。

(2) 生涯スポーツ

生涯スポーツは、発達段階の各時期(life-long)、各領域(life-wide)において、誰でも必要があれば、いつでもどこでも実行の機会が与えられるように、スポーツの条件整備をしていくこととかかわっている。逆に、この条件整備はまた、国民のスポーツ実行の裏づけを必要とすることも忘れてはならない。

このように考えると、スポーツが生涯スポーツになるためには、スポーツする仕方を実習させる中で、「なる」ことの意味づけを生徒にしっかり体験させていくことである。しかも、生涯に亘るスポーツ生活の技術、習慣、態度、わけてもその基礎となる感覚的運動能力は、幼少年期の比較的早い時期に形成させておくことが望まれる。

特に、幼少青年時代にはスポーツを個人の能力や個性に応じて、体・徳・知ないし、体・技・心へのかからせ方を考えていくことが必要である。スポーツすることは、楽しさ・喜びという情念を醸成させ、心と体と一体化し、心の健康になることを自覚させるものであり、そこではまた、没我的個人対個人のホンネのよい人間関係が生まれるものであるから、このホンネの人と人との出遣いを自然のうちにより多く味わわせたいものである。

2. 学校スポーツのあり方

(1) 教科体育のあり方

このような観点から学校スポーツを眺めると、生徒にとってはスポーツそれ自体が絶対的価値をもつことになる。したがって、教材は相対的なものとなるから、学習者以外の教師・施設・時間・学習内容などはすべて可能な限り、選択の巾を大きく設定することが必要になるし、生徒にはそれぞれ個人にマッチした内容をゆとりをもって選択させ、教師は長期的立場から心理的指導を試みていくことになる。

今回の要領では、このような点を考慮して運動領域や配当時間は、各学校の自主的判断に委ねた。しかし、中・高校ともに学習すべき最低種目数が義務づけられているので、これらをすべて学習するとすると個々の種目に割り当てる時間が不足する。

したがって、小・中・高校を通じて経験しようような種目と断続的にしか経験し得ない種目、または初めて経験する種目などといったようにいくつかのグレーディングに分けて学年に配当すべき種目・時間数を算出し、指導することも一方法である。

因みに高校の要領では、履修すべき運動種目数は1年次・5～6種目、2～3年次・4、6種目で、どの種目を選択するかは生徒の意志を尊重し、施設や教師の実情の許す限りこれに応えることになっている。

とはいえ、学校はいずれも施設・用具に限られているため、施設利用のプログラムを綿密にたてねばならないだろうし、施設確保のため施設利用と指導者の活用を広く社会に求めていかねばならないだろう。

生涯スポーツの立場からは、ハード・ソフトいずれの側面についても広領域の中でとらえて準備し、特に、中学校以降の段階ではスポーツ教材に思い切って時間を割当てるようにすることである。

(2) 学校スポーツクラブのあり方

学校スポーツは、スポーツクラブに参加することによって生涯スポーツへの意欲や能力が培われていくように導いていくことが望まれる。そのためには、生徒一人ひとりの発達原理と生活原理に則してスポーツする仕方を見直すことが重要である。

例えば、スポーツの実施の仕方にしても技術や体力の程度に応じて、毎日練習する者、週3日練習する者、週1日だけしか練習しない者とか、1日の練習量にしても3時間程度、2時間以内、1時間以内といった班別にして運営したり、また、トライアスロンのように種目のマルチ化や混合ダブルスのように種目のミックス化を考えたり、球技でもサッカー（脚）型のもとバレー・バスケット（腕）型、デュアル的なものなどを組み合わせるなどの方法も考えられる。もちろん、学校の伝統性や地域性を生かすことも忘れてはならないことである。

また、何かイベントを催す時は、自分達の能力でできることがらを積極的にやっけていく、運営にしても費用にしても自律的に能力を創出し合うことである。そして、イベントの遂行過程を通じて①結果よりも過程が重要であること、②全員の参加によりスポーツ実行の内容を豊かにすること、③イベントの重点を決め、終了後それがクラブの育成に役立つようにすること、④他校クラブや地域クラブとの交流を考えること、⑤クラブ活動は集団活動だから成員のコンセンサス（社会的一致）をうるまで話し合うこと……などである。

この他、クラブや運動部は完全に選択制になる高校以前の学校段階では、入退会が比較的自由で生徒個人の好みに応じていくつかのスポーツ種目が経験できるように配慮することも必要である。

(3) 地域スポーツの組織化

生涯スポーツは前述した如く、生涯を通じてスポーツ生活を楽しもうとするものであるから、学校・家庭・地域それぞれの教育機能を問いなおし、その再体制化を試み統合化を計るべく努力することである。

このような視点に立って、地域での小・中学生に目を向けると、学校のスポーツ部員であっても地域の施設で練習したり、そこのクラブに加入して試合にも出場するといった傾向がみられる。野球などはこの典型である。試合を目標に練習するのだから、選手になるための内部の競争も激しい。この傾向は最近では、都市部から郡部へ移行しつつあるといわれている。もちろん、地域のクラブは学校クラブに比し、施設も指導者も指導法もはるかに勝れており、単位時間当りの学習能率も効果的だということだ人気がある。（学校クラブは一途に衰退傾向にある）。

ただ問題は、地域クラブは金がかかるということである。この点、西ヨーロッパ諸国の社会スポーツクラブに学ぶべきことが多い。望むらくは、わが国でも運動を中心とした生徒の生活実態と発達課題、及び生徒の欲求の正確な把握に基づいて指導内容がつけられ、これをもとにスポーツ指導のなされることが期待される。このようにすれば、スポーツを愛好し、スポーツ実行の技能・態度が

チームプレーの喜びを味わう中で確実に体験されていくと思うのである。

そして、そこでは生徒達に体による人間の心の豊かさを集団や社会にとって最も大切なものであることを学習させていくことができると思うし、また、運動が体だけでなく心を鍛えることになるように指導すれば、社会のストレスにも堪えられ、自律的生活にもプラスになると思うのである。

結 び

教師は、学校スポーツを指導するに当って、科学の知見を技術指導やクラブ指導に生かすと同時に、そこで得られたデータをもとにさらに理論化を試みていくことである。それがなければ、生涯楽しめるスポーツを真に生徒に体験させることは難しいだろう。そして結論的には、教師自らのスポーツをすることの喜びの体験こそが、生徒のスポーツの愛好的態度を高め、このような態度が生涯スポーツへの主体的態度を形成することになるのである。いつの時代にも教育力はいつも教師の努力と工夫に依存するものだからである。

(目白学園女子教育研究所長・教授)

一人一人が課題を持ち、意欲的に活動するボール運動学習の追求

— 第5学年におけるバスケットボールの指導を通して —



愛媛県松山市立石井東小学校
校長 水木 壽一



学級数 34
児童数 約1,275
体育主任 教諭 芝田 眞次

〒790 愛媛県松山市越智27-1

☎0899-57-7545

1 研究のねらいについて

楽しさや喜びを味わわせることのできる学習の場とは、児童が主体的に課題を設定し、解決していくものでなくてはならない。児童一人一人が自己の体力や技能に適した運動課題を設定し、その課題を解決することによって、必要な能力や態度も習得でき、運動の楽しさを味わうことができるであろう。そこには、児童一人一人の能力に応じた学習計画が必要になってくる。児童と教師がともに立てた計画にしたがって、児童はより高次の学習課題に挑戦し、達成することによって、満足感も味わえ、意欲も高まってくると考えられる。

2 運動の特性

(1) 一般的特性

1個のボールを中心にして、チーム対チームまたは個人対個人が定められた規則の中で、いろいろなボールを手や足、用具を使って、はずませ、転がし、けり、パスやドリブルをして、ゲームを行う競争的なスポーツの特性を持っている。

(2) 児童の側に立った特性

① 児童の興味関心が非常に高い。 ② ルールが分かりやすい。 ③ チームゲームを通して、集団技能及び個人技能を身につけることができる。 ④ 敵や味方の動きやボールのスピード、ボールの方向を判断して素早く動く力を身につけることができる。 ⑤ チームワークが要求され、友だちへの思いやりの心を身につけることができる。 ⑥ ルールを守ることや正しい試合態度を身につけることができる。

3 運動の楽しさ

(1) 本質的な楽しさ（運動の特性に触れる楽しさ）

個人技能や集団技能を習得しながら、集団で勝敗を争う楽しさ。

(2) 児童の側に立った楽しさ

- ・ シュートをする楽しさ
- ・ シュートが決まる楽しさ
- ・ パスする楽しさ
- ・ ボールを自由に操る楽しさ
- ・ ゲームに勝つ楽しさ
- ・ 運動欲求が満たされる楽しさ
- ・ 教師や友だちに認められる楽しさ
- ・ 作戦がうまくいったときの楽しさ
- ・ 友だちと協力する楽しさ
- ・ チームや自己の課題が達成できたときの楽しさ
- ・ 自己の技能や集団技能が向上する楽しさ
- ・ 役割分担をする楽しさ

4 個人差に応じた指導の手だて

(1) 事前

- 児童の実態把握をする。(アンケート調査、レディネステスト、既習学習の総括的評価資料)
- 書物、VTR等によって興味づけを行う。

(2) 事中

- 試しのゲームを行い、チーム力が均等になるようなチーム編成を児童と教師が共になって行う。
- 一人一人が十分活動できるような学習の場を設定する。
- 課題達成のできる場を十分に与える。
 - 課題の認識及び修正(自己評価、相互評価)ができるための話し合いの場を設定する。
 - 課題達成のための練習の場を十分確保する。
- 学習記録カードを活用する。
 - カードを媒介として、教師が個々に指導助言する。
- 個人差を吸収できるようなルールの工夫をさせる。
- 要配慮児に対しては、個別指導を行う。

(3) 事後

- 感想文等によって学習の反省をさせ、個の実態・変容等を把握し、今後の指導に生かす。
- 課題達成の不十分な児童に対しては、場を設けて継続的に個別指導をする。

5 学習指導過程と学習課題・評価について

(1) 学習指導過程の工夫

① 児童中心・ゲーム中心の学習指導過程の工夫

ボール運動は、本来集団対集団の競争的スポーツの特性を持っており、ゲームそのものを楽しみながら集団技能や個人技能を伸ばそうとするものである。したがって、技能を身につけさせてゲームをするのではなく、ゲームを通して技能を身につけさせることが大切になってくる。児童(チーム)に学習計画・学習課題を立てさせ、チーム独自の活動を主体的に行わせる。

〈 指 導 計 画 例 〉

学 習 計 画	〈作戦を工夫してゲームをしよう〉	大 会
	(3対3のゲーム) (5対5のゲーム)	

学 習 計 画	〈ルールを工夫してゲームをしよう〉	〈作戦を工夫してゲームをしよう〉	大 会

- 一人一人を生かすために、3対3のゲームから入る。
- ルールの工夫は学級全体の話し合いで行う。
- 一人一人を生かすために、ルールの工夫(各グループごとのルールづくり→作戦)から入る。
- ルールの工夫の話し合いは、学級全体とグループでの話し合いをうまく活用する。

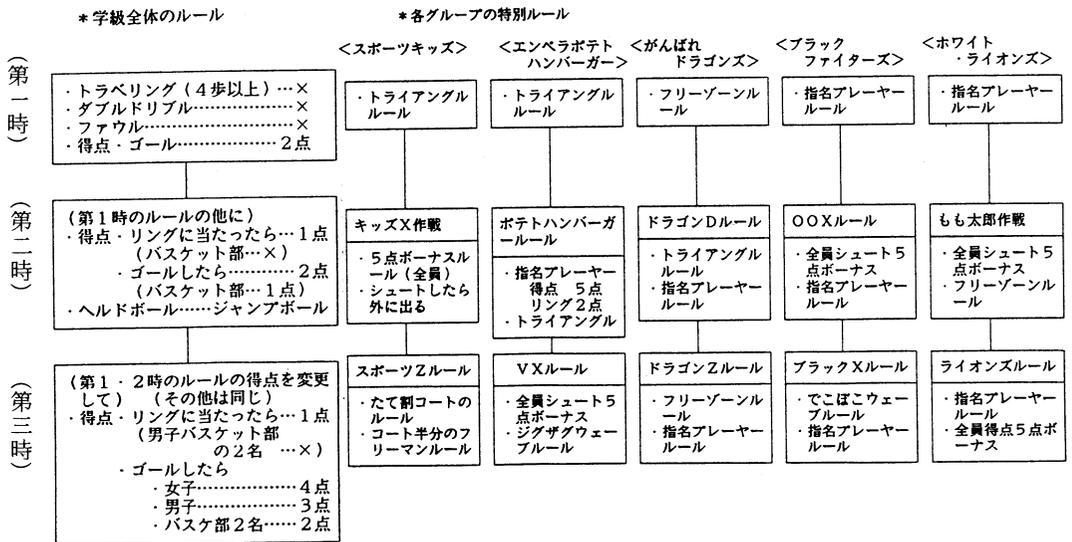
② 指導過程の一般化

課題→ためのゲーム→課題→練習→ゲーム→課題→練習→ゲーム→次時の課題

③ ルールの工夫

だれもが楽しくプレーできることをルールの工夫の原点とし、ルールを工夫することによって一人一人を生かすようにさせる。各チームごとでも自分たちの実態に応じたルールを工夫させ、そのルールを活用した作戦を考えさせる。児童が主体的に、場に応じたルールを工夫していく姿が大切である。自分たちでつくりだしたルールは、自分たちの力で守り育てるようになると思われる。

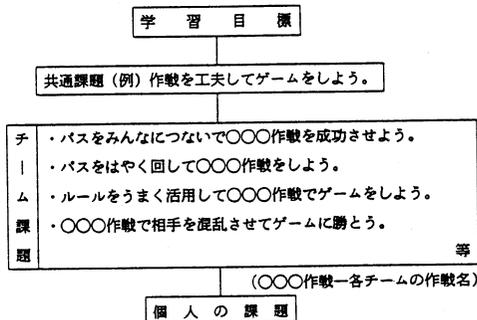
〈 ルールの工夫例 〉



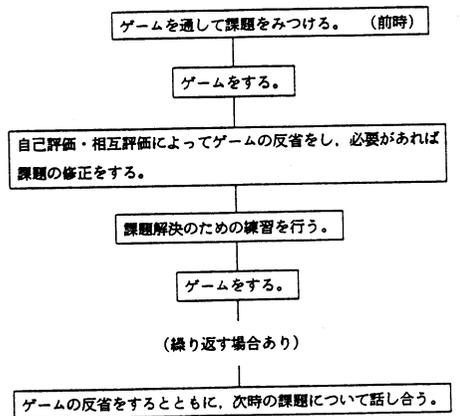
(2) 学習課題

① 課題について

共通課題を受け、各グループの実態に応じたグループの課題を決め、そのグループの課題を受け、各個人の能力に応じた個人の課題を決める。必要に応じて、態度・心情面の課題を設定してもよい。



② 課題の持たせ方及び修正のさせ方



(3) 評価

評価には、技能に関する評価と仲間との協力や積極的に活動しようとする態度に関する評価が

る。これらの評価を毎時の学習中、計画的に行う必要がある。学習内容の習得度、内容や指導法の適否を確かめ、問題があれば修正、またフィードバックするなどして学習指導に役立て、診断的評価・形成的評価を行うことが大切である。特にボール運動においては、グループの活動が主になるので、学習記録カード等を十分活用して、グループ内での相互評価、グループと個人の関わりを考慮しての自己評価等を行わせることが重要だと思われる。指導者の評価においては、児童の学習記録カードや教師のチェックカード（毎時簡単に評価）等を資料として評価を行い、その評価をもとにグループ・個人の指導に役立てていくようにしたい。

① 児童による評価

ア 自己評価

- ・ 毎時の学習のまとめの段階で、個人の課題が達成できたかどうかを反省し、学習記録カード（個人カード）に記入する。
- ・ 自分の反省をもとに、次時の課題を持つ。新しい課題への意欲を持つ。

イ 相互評価

- ・ 学習中に友だちのよい動きを見つけてほめたり、励ましたり、アドバイスをし合ったりする。
- ・ 学習のまとめの段階で、グループの課題が達成できたかどうかを反省し、学習記録カード（グループカード）に記入する。
- ・ グループでの反省をもとに、新しい課題を持つ。

＜個人・学習記録カード＞

チーム名 ふた、ドリムス	5年5組 担任等 名氏
学習課題 バスをうまくしてゲームをしよう	
チームの課題 バスをうまくしてスネークボールを成功させよう	
自分の課題 バスをうまくする	
反省	
1. 自分の課題をどうやって取り組めたか	◎
2. 練習がうまくできたか	◎
3. 自分の課題が達成できたか	◎
4. 仲よく協力して運動できたか	◎
ふたあいの時、全員が シートできたのでよかったです。 思いきりうごけた。 バスをうまくして、スネークボールを成功させよう。	

＜グループ・学習記録カード＞

バスケットボールチームカード	5月27日 (金)	チーム名 こがねのこ	場所 体育館
学習課題 作戦を立ててゲームをしよう		イ ま パ イ	
チームの課題 よく動いて相手チームの守りを破ろう			
自分の課題 パスをうまくする			
反省			
1. チームの課題をどうやって取り組めたか			◎
2. 練習がうまくできたか			◎
3. 自分の課題が達成できたか			◎
4. 仲よく協力して運動できたか			◎
バスケットボールの試合は、みんなが 全員がシュートができた。 アブをしようとした。 売った。			

② 教師による評価

- ・ 学習中に児童を十分観察し、個別指導、グループ指導に役立てる。
- ・ 学習中にチェックカードを活用して、到達度の高い児童、低い児童の評価を行ったり、数名の児童に焦点を当てて、伸びの評価を行ったりするなどして、評価を積み重ねていく。
- ・ 指導目標・指導内容、指導の要点を明確にした上で評価基準を設定し、的確な評価を行っていく。
- ・ 個人及びグループの課題達成における評価、到達度評価を、学習記録カードや観察等によって行う。その際、技能面の評価だけでなく、関心態度面の評価も大切にする。

- 学習記録カード、チェックカード、観察等を通して、グループ・個人の課題・評価をまとめて一覧表にし、その評価をもとに毎時の指導の手だてを講じ、評価が評価だくに終わらず、指導に生きるよう配慮を行う。

＜課題及び評価一覧表＞

グループ名	氏名	グループの課題	グループへの指導	第 2 時		グループの課題	グループへの指導	第 3 時	
				評価	個人の課題			評価	個人の課題
ぎやく点とつげきドラゴンズ	K. H	協力して三角作戦を成功させよう。	女子は常に広がりを持って三角の形を小さくさないよう	1回はシュートをす	○	よく動いてジグザグ作戦を成功させよう。	動きが広がることは位置についてではダメな指子でマークするが、レーンヤーンの	△いつも動きが止まらないよう動き回	◎
	◎M. A			協力し合って、ゲームをする。	○			走り回ってパスをする。	◎
	M. K			協力し合って、パスをする。	○			よく動いて、女子にパスをまわす。	◎
	O. S			全力で走って、シュートをする。	○			よく動いてきちんとパスをする。	◎
	K. T			味方にうまくパスをする。	◎			1回は絶対にシュートをする。	◎
	Y. K			男子にうまくパスをする。	○			歩かずに、走ってパスを受ける。	△
									◎

6 展開（第3時）

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点（評価の観点 ◎）
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> ルールを工夫してゲームをしよう。 </div>	
1.学習課題について話し合う 2.チームごとにチームや個人の課題について確認し、準備運動をする。 3.ためしのゲームをする。 4.課題解決のための練習やゲームをする。 ○ためしのゲームの反省と練習 ○第1ゲーム ○第1ゲームの反省と練習 ○第2ゲーム 5.整理運動をする。 6.学習のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> 課題の確認をしっかりとさせる。 課題意識を持たせ、意欲を高めさせる。 工夫したルールや攻め方等を確かめさせる。 各チームの特徴、一人一人の能力を生かし、見通しを持った練習方法で協力して取り組ませる。 ◎課題解決のための工夫した練習をすることができる。 グループごとの特別ルールを確認させる。 ルールを工夫し、ルールを活用した作戦で意欲的に取り組ませる。 ゲームの反省をもとに、必要に応じてチームや個人の課題を修正させる。 第1ゲームの反省や練習を生かし、更に工夫したルールを活用した作戦で積極的なゲームを展開させたい。 ◎ルールを工夫し、ルールを活用した簡単な作戦でゲームをすることができる。 ◎規則を守り、友だちと互いに協力して楽しく運動することができる。 使った筋肉をゆっくりと大きくほぐさせる。 チームで考えたルールは、一人一人を生かせるルールだったか、よく話し合わせる。 学習記録カードを活用させる。 次時の課題についても話し合わせたい。

「意欲と楽しさにあふれた体育学習」一人ひとりを生かす ボール運動を通して



秋田県本荘市立鶴舞小学校
校長 長谷川 純 一



学級数 44(内 特徴3)
生徒数 1,533
体育主任 吉田 一 男



教諭 岡部 和 則

〒015 秋田県本荘市出戸町字水林 ☎ 0184-22-1422

1 はじめに

児童数の割に校地校舎が狭く、子ども達は思いっきり体を動かしたり、運動したりできないのが現状である。したがって、運動に対して持続力や意欲を欠く子、運動嫌いの子が目立ってきている。肥満傾向の子もふえてきている。体位は都会型になってきているが、体力は必ずしもよくない。

学校体育では「体を動かして汗をかくさわやかさ」「運動をすることの喜びや楽しさ」を味わわせ遊びや運動を体育の生活化へと広げ、自己の技能や体力を向上させ、健康の保持増進に努める子どもの育成を願っている。そのことが、生涯を通して運動を実践していく能力や態度を養うことになるからである。

強い学習意欲は、自分達の自由な意志や仲間とのコミュニケーションによってどのようにするかを決めることができるものであり、しかも、その決定を行動に移すことによって自分達の能力が最大限に発揮でき、自分たちの能力が高まっていることを体感したときに生じると言われている。子ども達が、それぞれの運動の特性に対して、意欲的に、しかも創意工夫をこらしながら挑戦していく過程の中で、克服・達成・競争・変身などの楽しさを味わうことができるものとする。

楽しい体育学習は、子ども達が自分の運動欲求を充足したときに成立すると言われる。子どもが自分の能力に適した課題を持ち、進んで意欲的に取り組んでいける場を設定し、役割分担し、ルールやきまりを工夫し、友達と励まし教え合って学習できたときに大きな充実感・成就感を味わうことができるにちがいない。ひとつの課題に挑戦し、克服達成したら、また、新しい課題に向かって根気強く最善を尽くして挑戦していくひたむきな姿勢を持つ子、意志力の強い子を育てたいと願っている。

本郡市では、今年度「楽しい体育」「一人ひとりを生かす体育学習」をめざして秋田県学校体育研究本荘大会の研究会を開催するに至り、特に「ボール運動」の領越を通し、どのように個人差のある子ども達を体育学習に親しませるか、ということが課題とされた。全員が満足する体育学習をどう構

築すべきか、ましてや大規模校である本校にとっては永遠の課題のように思われたが、主題に少しでも近づくことを願い実践してきたことをまとめて述べてみたい。

2 研究の視点

研究をすすめるにあたり、これまでの体育学習、特にボール運動領域の次のようなことに視点を当てて解明していくことにした。

- (1) 「ボール運動」の問題点は何か。
 - ① 特性のとらえ方は適切か。
 - ② チームワークのよいチームづくりをしているか。
 - ③ 子どもにまかせっきりの学習にしていないか。
 - ④ 教師が前面に出すぎていないか。
 - ⑤ 固定したルールでゲームをさせていないか。
 - ⑥ 練習ばかりしていないか。
 - ⑦ マナーが身についているか。
 - ⑧ コートづくりの工夫をしているか。
 - ⑨ 学習カードを工夫して学習を進めているか。
- (2) 「自ら学ぶ力を育てる学習指導」をどうとらえるか。
 - ① 自ら学ぶ力とは何か。
 - ② 課題追求力とは何か。
 - ③ 自己評価力とは何か。
 - ④ 楽しさとは何か。
- (3) 「指導法の研究」をどのようにすすめるか。
 - ① 学習のねらいをどう設定するか。
 - ② 学習過程をどう組み立てるか。
 - ③ チームの課題と個人の課題をどう結びつけるか。
 - ④ チームをどのようにつくるか。
 - ⑤ ルールや場づくりをどのように工夫するか。
 - ⑥ 自主的自発的な学習のできるカードをどう作成するか。

上記のような点について研究実践していくことにしたが、ボール運動を研究するためには、どうしても既成の概念がはたらかき、これまでの研究の単なる延長線になってしまいがちである。そのため、本郡市での実践の少ない「ハンドボール」をとり上げ、新しい教材の開発・工夫という視点からも、研究を深めることにした。

3 研究の実際（四年「ミニハンドボール」研究授業の実践から）

(1) 「ミニハンドボール」の単元をとりあげるまで

児童は、これまでどのボールゲームに対しても興味・関心を示し活発に見えたが、ゲームの様相は積極的にボールを追いかける男子に比べ、女子は、一部の児童を除き、ボールを怖がりボールの動きについていけない児童が多かった。そこで、集団スポーツの楽しさ体験を一人ひとりに味わわせるために教材の開発や工夫の必要感に迫られ、既成のルールにとらわれにくいハンドボールをとり上げる

ことにした。

経験の少ない単元ではあるが、ゴール形態はサッカー系でボール・ボディコントロールは、バスケット系であるため、児童の反応は「すぐやれそうだ」「すぐやってみよう」ということだった。しかし、試しのゲームでは、前単元でポートボールを経験しているため、その様相は、今までのように技能の劣る児童が全くボールに触れないものであった。この問題により児童達の中から男女混合のゲームをしていくよりも、男女を分けゲームに慣れることが必要で、後に男女混合でやってみようという意見が出て、およその学習計画が立てられた。

本単元では、既成のハンドボールを教え込むのではなく、新しいルールのミニハンドボールをつくりあげる過程で、他の児童のことを考え、教え合い励まし合い、互いに認め合って初めてゲームとして成立することやどんなに技能に個人差があっても積極的にゲームに参加しチームの一員となることの大事さをとらえさせたいと考えてきた。従って、一単位時間は、単元のねらいにせまる過程として全員が参加しチームとして高まりを感じさせるゲームを目指し、ゲームの様相に目を向け、その問題を解決していくように学習を進めていきたいと考えた。

(2) 「ミニハンドボール」の特性について

① 一般的特性 2つのチームが入り交じって、手でドリブルやパスを使ってボールを運び、相手ゴールにシュートして得点を競い合うことを楽しむ運動である。

② 中学年の子どもから見た特性

- ハンドボールは、まったく経験がなく、ルールについては、ほとんど理解していない。しかしボールゲームに対する興味関心は高く、得点することや勝つことに喜びを持っている。
- 勝敗を競うゲームでは、自分の力を出し切ってチームや自分のめあてを達成したいと願っているが、一部の子どもは活躍によるゲームになりやすい。
- ボールを操作する技能差が著しくあらわれてきたが、それを作戦として生かす動きが見られないため密集状態になりやすい。また、特に投力の男女差が目立ってきている。

(3) 意欲と楽しさにあふれた学習にするために考えたこと

① 自分達の力に応じたゲームづくりの過程を大事にすることにより、自分達でつくり上げたルールとして意識し、主体的な取り組みにつながると考える。

② 勝敗の結果だけにとらわれず、ゲームの中での個々の動きを高め、メンバーを生かしたゲームのできるチームにするために、ルール・場・人数・用具などを考えていきたい。

③ 一人ひとりが活動できる場を考慮し、互いに認め合ったり、協力したりする態度を大切に学習を進めていく。

(4) 授業実践の結果から

① グループづくりについて

中学年では、男女混合が望ましいと言われるが、子ども達の学級における人間関係をとらえた上で決定するものであり、体育の授業だけでなく、他の授業の時の事も考えた編成が必要に思う。また、決して教師が一方的に編成するのではなく、子供とともに話し合い納得した雰囲気や興味関

心につながるだろう。グループのあり方についても十分に事前指導しておかないと、問題が起きたときに自分達で解決できないでしまう。そうすると興味がうすれ、意欲が途絶えてしまうことになる。つまり体育に限らず、他の授業のグループ学習の経験がどの程度であるのかどうかを教師は見極めておく必要があると考える。

② ルールづくりについて

ルールは、子ども達の実態により子ども達によってつくり上げることが基本であるが、子どもの意見といっても一部の力のある者の発言であることが多い。様々な能力を持ったチームのことを考えた適切なルールであるのか、教師が判断してやらなければならないだろう。何でも子どもに任せることはできない。初めはただやらせることにし、そうするとすぐにおもしろくなる。そこで、おもしろくするにはどうしたらよいか、ということをお話合わせる。これを繰り返すことにより子ども達は、自分達に合った自分達で考えたルールづくりをし、与えられたおしつけから逃れて意欲的になると考える。もちろん、教師側からも適切な助言や指導が大きなポイントとなるのである。

③ チームのめあてと個人のめあて

チームのめあてがあり、それをもとに1個人のめあてを考えていくのか、個人のめあてがありそれを集約してチームのめあてとするのか、難しい問題だが、どちらとも考えることができるだろう。だが、チームで競い合うボールゲームでは、どんなに能力差があっても、チームに貢献できた喜びを大事にしたいと考える。勝敗にこだわるのは当然であるが、勝敗に関係なく個人が認められるチームの雰囲気大事にし、めあても個人一人ひとりを大切にしているものが持てるようにチームを高めていかなければならないのである。

④ 学習カードについて

中学年の学習カードは、できるだけ簡単で長続きし、自己評価の高まりがとらえやすいものにして考えてきた。また、子ども達にとって満足感があり、必要感がなければならない。しかし、子ども達の個人差が大きく、全てを満足させるカードとなるとかなり難しい。自己評価する力がまちまちであるのだから、項目を細分化するよりは、幅を広げて評価させた方が効果的である。

また、特にボールゲームの場合は、他のチームの動きを見ることや自分の動きを見てもらうことなどの相互評価も大事にしたい。自分が見られていることで、自分を励まし、意欲が高められることになるからである。

評価の場や位置、時間については、もっと検討する余地があるが、適切な方法がないのが実際のところである。

⑤ ハンドボールの教材について

今回は、教材の開発ということで新たにハンドボールを取り上げてみたが、中学年の子ども達にとっては、比較的技能が複雑でないため、その差があまり目立たないことや、誰にでも手で思いっきりゴールにシュートできることなどを考えると、とりつきやすい教材のように感じる。それだけに、今後の指導方法を改良する余地は十分にあるだろう。特にドッジボール系からポートボール系へのゲームの様相の橋渡しとしては、適切な教材ではないかと考える。

5 今後の課題

- (1) 大規模校では、「学級の子は担任ひとりで育てる」という考えを捨てて、教師が協力教授の方法を導入し、みんなで育てるようにT・T方式を取り入れなければならない。そのためには、基本の運動とゲームの関連をどう位置づけるか、組み合わせ単元の工夫はどうするか、また特にボールゲームは、一つの単元の特性を十分に体感させたいが、どのようにカリキュラムに位置づけるか、学校の実態や子どもの実態を十分考え、時間配当なども考慮していかなければならない。
- (2) 全ての子どもが「ボール運動」の特性を意欲的に楽しみ、仲間とのよい人間関係の中で自発的・主体的に学習を進めていくには、それぞれの運動の場を保障してやるとともに、めあて解決の時間を確保してやる必要がある。個人またはチームで「めあて」を決めるとき、自分の能力・チームの実態からかけ離れたものを設定し、課題を解決できないままに学習を終えてしまい、チームの高まりや個人の高まりをとらえることができない場合も多い。いかに、チームや個人のめあてを持たせその高まりを感じとらせるかを大事に考えていきたい。
- (3) 技能差、個人差は、どうしても出てきて、ワンマンプレーが目につくが、子ども達の意識は、勝ち負けに大きなウエイトがあり、負けたときの弊害が多い。その問題をいかに子どもたちに解決させ、チームプレーに目を向くさせるか、より高まったゲームを楽しませ、相手のチームに意欲的に挑戦する方向に導くかが大事になってくる。そのためには、学び合える学級づくり、学級集団全体の高まりがなければならない。体育の時間だけでなく、学校教育全体を考えた学級づくりを考えていく必要があるように考える。
- (4) 子ども達の欲求は、統一されたものでなく、様々な体験が、刺激となってわき上がってくるものであり、教材に対して一人ひとり違ったとらえ方を持っている。今の子ども達に、どの教材を、どのような教材として、どのような手段で与えるか、によって、子ども達の運動に対する意識は、かなり違ったものになりえる。そのためにも、今の教材の見直しはもちろん、新しい教材をもっと取り入れ、子どもたちに与えたい必要感のある教材を選び出したいものである。ましてや、大規模校の本校では、なかなか、時間とスペースを保障してやれない現状であり、今後も教材の見直しを検討していかなければならない。

6 おわりに

ボール運動の領域を中心として意欲と楽しさのあふれた体育学習について研究を深めてきたが、本校においては、満足するだけの時間やスペースは与えられないものの、限られた時間やスペースを効率的に有効に使わせる手だては、あるように感じた。

これからは、現代における子ども達の生活経験の変化に対応しながら体育学習を見直し、個性を尊重しながら子ども達一人ひとりを満足させる体育学習をめざして研究を深めていきたいと考える。

一人一人に「自ら学ぶ力」を育てるには どのように指導していけばよいか



島根県出雲市立今市小学校
校長 和田 貞夫



学級数 19
生徒数 720
体育(研究)主任 青木 茂

〒693 島根県出雲市今市町北本町 2-1 ☎ 0853-21-2544

低学年における「わかってできる体育学習」の指導についての一考察

2年生 手のばしタイヤとびこしの実践

I はじめに

今までの体育学習の指導法の多くは、教科の特性上、運動量の確保、技能の向上に主眼をおいた学習が中心にすすめられたように思う。その結果、体育学習における知的側面が軽視されることになり、運動能力の優れた児童が体育学習を好む反面、一部の児童の体育嫌いをうみ出すことになったのではあるまいか。そこで、従来の体育学習の指導法において、重視されてきた運動量の確保、技能の向上に加え、技能面の知的理解をはかることも重視することにした。子ども達が発見する喜びをもちながら、技能を理解し、その技能に習熟していく学習が成立するのではないかと考え、この指導法を「わかってできる体育学習の指導」とした。

II 主題設定について

1. わかってできる体育学習

体育学習の習熟過程を、下記のようにとらえている。

- | | |
|----------|------|
| • わからないし | できない |
| • わからないが | できる |
| • わかるが | できない |
| • わかって | できる |

(小林篤氏の提言より)

そして、この習熟過程を把握する手段として、「できる」「できない」が明確な克服型の教材における技能を中心に研究することにした。また、「わかる」とは、その技能にせまる運動の大切なポイント、練習過程を分析的にとらえることができる力とした。そこで、「わかってできる体育学習の指導法」とは、運動量の確保、技能の向上も大切にしながら、技能面の理解をはかることにより、発見する喜びを味わらせるような指導法ととらえた。こうした技能面の知的な理解や関心等を大切にしたい体育学習からは、主として次の二つの効果が生まれると予想した。

- 知的理解の深まりや関心の高まりによって、子どもが「やる気」をおこすことになり、その結果、反復練習を支える意欲が生まれ、動きを正確にしようとする意識が高まるのではないか。
- 書くことにより、わかったこと、わからないことが確かになり、考えがより深められ高められる。そして、その過程で、たゆまず努力していくことの大切さを理解することができるのではないか。

2. わかってできる体育学習のめざす子ども

- 身体と対話のできる子
どのくらいできるのか、どこが難しいかなど、身体を通して考える。
- できる友達、教師の示範、資料を見てその良さに気づく子
上手な友達の演技を観察し、自分の経験をふまえて良さに気づく。
- めあてがもてる子
現状に満足しきってしまうのではなく、新たな課題を発見しようとする。
- 友達に教えてあげることのできる子ども
運動の大切なポイントを理解し、説明ができる。

3. わかってできる体育学習の学習過程

「わかってできる体育学習の指導法」を成立するための授業の条件を、下記のように考える。

- 身体の成長を促す適切な運動教材を経験させる。
- 力いっぱい運動する時間が確保されている。
- 仲間と喜び合える場がある。
- 運動についての知的理解を促す時間が確保されている。

■ 「わかってできる体育学習の指導法」の条件

1. 運動の大切なポイントを見つけ、よりよい運動ができるようになるため、体育ノート、体育作文の書き方等の手だてが確保されている指導
2. 運動の大切なポイントを理解させ、仲間とかかわり合って学習する場の設定
3. 既成のルールや方法にとらわれないで、子どもが仲間と力いっぱい運動に取り組むことができる魅力ある教材の開発

以上の3つの条件を満たす授業を立案し、実践することが、「わかってできる体育学習の指導法」になると考えた。

IV 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の授業の構想

1. 研究対象

2年生児童（男子19名 女子16名）

2. 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の内容

(1) 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の運動に対する考え

「〇〇〇〇タイヤとびこし」の運動は、低学年の児童が喜んで挑戦する運動である。跳べた時の喜びが大きく、児童の運動への意欲を高めることにもつながる運動であるので、是非低学年で体験させておきたい。

中学年において、とび箱運動でつまづく原因は下記の点だと考える。

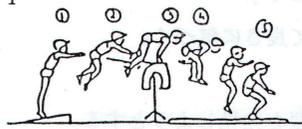
- 踏み切りからとび箱への着手
- 空間局面での前のめりの姿勢
- 前のめりの姿勢からの着地

上記の3つの要素を喜んで挑戦することを低学年の間に身につけさせておくと、中・高学年へのとび箱運動が充実すると考える。そこで、この3つの要素となる動きを自然に身につけさせるために、「〇〇〇〇タイヤとびこし」を考案した。尚、「〇〇〇〇」の部分は、学習過程の中で

子どもと一緒に、運動の特性を考えながらネーミングしていくものとする。

(2) 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の動きの分析

資料-1



資料1の②③④の動きが、タイヤをとびこすためのポイントになる。この動きは、とび箱運動につながる発展性をもった動きである。この②③④の動きを、タイヤとびこしのゲームを通して、自然に身につけさせようとした。

また、踏み切り板からタイヤの距離をのぼすことにより、手をのぼす姿勢でタイヤに着手することが身につくと考える。

(3) 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の方法

① 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の教具

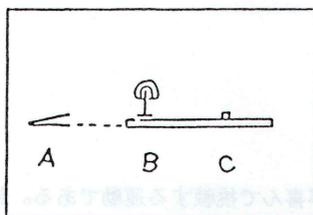
資料-2



室内で、低学年が手軽に準備でき、とびこしの運動ができるために開発したタイヤとびこしの台である。

② 「〇〇〇〇タイヤとびこし」のやり方

資料-3



- A→Bまでの距離は、20 cm巾の踏み切り板距離調節器を使用するので、20 cm単位で距離をのぼす。
- B→Cまでの最高値は、30 cmとする。
- A→Cまでの最高値は、90 cmとする。
(全長を90 cmとするのは、跳箱の長さを考慮に入れてである。)

(4) 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の場の設定

学習の場は、低学年でも準備(マット、巻尺、ポスト、タイヤとびこしの台、テープ)が短時間に設定できるように配慮する。

V 「〇〇〇〇タイヤとびこし」の指導の実際

1. 第1次 —— 1時間

「〇〇〇〇タイヤとびこし」の内容や方法を理解させ、学習課題を明確にさせる。また内容や方法を理解させるために、次の点を重点に説明した。

- 「〇〇〇〇タイヤとびこし」は、タイヤをとびこす運動である。
- この運動は、資料3の図を見て、役割をさがすことやルールの工夫、グループの全員の協力が

あって初めて学習が成立する。

- 係、役割、ローテーションの方法を工夫する。

2. 第2次 —— 4時間

「〇〇〇〇タイヤとびこし」を追求し、各グループの得点が向上できるようにさせる。

(1) 第2次の第1時

指導内容は、下記資料5の体育ノートに記録されている内容である。

資料5

10/27.がんばり体そう
おそく人のかべ、ヤカ、た
3. 手おしはしり
5. カイルとび
2. () タイヤとびこし
20cm
20cm
() タイヤおろしとびこし
ゲーム

- T 各グループで考えたルールを出し合って、みんなでルールを決めてみよう。
- C₁ マークを両足がこえたら1点にしよう。
- C₂ 横から踏み切りの線を見よう。
- C₃ 1点にするかどうかは、審判長が判定しよう。

(2) 第2次の第2時

- T みんなの考えたルールで、1回目のゲームをします。(各グループ毎に練習)
- T みんなの考えたルールで、もう問題点はありませんか。
- C₁ 踏み切り板から足の出た時はどうしますか。
- C₂ 踏み切り板から手をのばしてタイヤに手をつくことが大切だから、踏み切りのところに審判をおこう。
- C₃ 審判と審判長ができたので、まわり方も大切だ。
- T まわり方は、各グループで相談しよう。
- C₄ それでいいと思います。(全員賛成)

(3) 第3次の第3時

- T 踏み切り板からタイヤの距離を、20cmから40cmにしましたが、審判や審判長をしていて気のついたことがありますか。
- C₁ 両足で踏み切った方がよい。
- C₂ 着地をする時、ひざを軽くまげるとよい。
- C₃ とびこす時、よくとぶ人は両足の間から手が出る。
- T もう気のついたことはないですか。
- C₄ 踏み切ってタイヤに手がつく時、よく手がのびる。
- 子どもの方から「〇〇〇〇タイヤとびこし」の大切なポイントつまり手のぼしが出てきたのでノートにメモさせ、意識づけをしっかりとさせた。

(4) 第2次の第4時

ゲームのまとめをする。

これまでの学習で分かったこと、できるようになったことを、学習カード、体育ノートを活用し、まとめを行わせた。

3. 第3次 —— 1時間

「〇〇〇〇タイヤとびこし」の作文を書く。

VI 結果と考察

1. 「手のぼしタイヤとびこし」の子どもの変容

格技(柔道)指導の推進と健全育成



東京都武蔵村山市立第四中学校
校長 菅井昭夫



学校数 17
生徒数 697
体育主任 教諭 武富博

〒190-12 東京都武蔵村山市大南 2-79-1 ☎ 0425-64-4341

1. 研究題目 「格技(柔道)指導の推進と健全育成」

2. 研究目的

昭和61年度より3年間、文部省格技指導推進校として指定を受け、「日本古来の格技(柔道)の推進と、格技における心身の鍛練をはかり、礼儀作法や安全指導、愛校心の育成」をめざした。

3. 実践内容

心身の鍛練・質実剛健な資質の向上、愛校心の育成とその向上発展に寄与する生徒をめざし、そのための全校的、組織的なとりくみをしている。特に今年度は、他領域との関連を中心とし、健全育成の精神を、各教科、道徳、特別活動の中に生かす、具体的なとりくみをしてきた。

《格技指導について》

(1) 格技指導(柔道)のねらいと他領域との関連

格技指導推進校の指定を受け、つぎのようないくつかの問題点があげられた。これまで本校では、冬季(1月～3月)の三学期に柔道指導を行ってきた。しかし、生徒の中には「寒い」とか「痛い」という声が多かった。そこで、保健体育科年間指導計画を作成する際に、どの時期が適当であろうかと考えた。

本校生徒の特徴は、素直であり行事には燃えるが、授業への集中力に欠ける。けじめがない、すぐに飽きてしまうという忍耐力に欠ける所がある。そこで、あえて「寒さに打ち勝つ」・「耐える」ということを、身体で学ばせた方がより教育的であると考え、以前からの冬季実施を続行することにした。

さらに、この研究を機に女子にも格技指導をとり入れるかどうかということも考慮した。それは単に、男子の格技の研究が全校的な取り組みとして発展していくのだろうかという疑問がでてきたからである。その解決には教育活動全体を通して、つまり単に格技にとどまらず、他領域との関連を踏まえた研究実践がなされることであると考えた。「まず自分を愛せ、そして他人を愛せ」という愛校心教育を本研究の根底に据えることとした。寒さに打ち勝ち、心身ともに健康で思いやりのある生徒の育成をめざした。

(2) 格技指導の基本的態度

① 思いやり・愛校心の育成

相対するふたりが直接組みあって、攻撃したり応じたりしながら、投げる・抑えるなど、相手のからだを使って自分の技能を高めていくという柔道の特性から、特に礼儀作法を重視し、練習や試合を通して相手を尊重し、思いやりの心を育て、それを日常生活に導入することによ

り、生徒の基本的な生活習慣の資質向上を図る。

② 柔道の厳しさ・楽しさを味わわせる。

厳冬期に柔道をあえて行うことにより、生徒に「耐える」ことのつらさを肌で感じさせ、日本古来の「寒稽古」のもつ意味を学ばせる。さらに、相手と直接組み、投げあったり、抑えあったりする楽しさを味わわせる。

③ 段階に応じた試合ができる。

各学年の到達目標を、「段階に応じた試合ができる」とし、日ごろの学習の成果の発表の場として柔道大会を実施する。

④ 班別による学習

身長・体重を考慮し、学習集団を4つに分け、同程度の体力・能力を持つ者が組み合わせることを配慮し、安全に効果的に学習させる。

⑤ 学習課題の把握

個に適した的確な学習課題を把握させるために、相互指導を重視し、課題解決の追求の場を設定する。

⑥ 自他の安全を図る。

冬季の授業という点を十分ふまえ、安全・事故防止には細心の注意をはらい、準備運動・補強運動・受け身を十分にさせる。また《練習中特に注意すること》として10項目をあげ、常に安全を図らせる。

(3) 柔道指導の実践

① 指導計画の作成

年間指導計画の作成にあたっては、生徒の実態を考慮し、本校の格技指導の目標をふまえ、他領域とのバランスを考え、1・2年生15時間、3年生は12時間とし、年間指導計画の中に位置づけた。さらに時間割編成を検討し、2学年同時の授業で施設使用の重なる問題点を解消した。

② 学習内容の精選

当初、指導者の経験不足や見通しのあまきから、多くの技を教えなければならないと考えていた。それは、少ない技では試合ができなかつたからである。その結果、試合どころか技の定着もみられず、意欲的な活動もなく、生徒にとってつまらないものになっていた。そこで、1技能2時間扱いとして教師指導型の一斉指導から、相互指導型の班別学習へと流れを変え、学習内容を精選した。

③ 技の系統化

各学年の到達目標を、「段階に応じた試合ができる」と定め、それにあわせて生徒の体力・運動能力を考慮し、技の配列を考えた。

冬季に行うこともあり、十分な運動量を確保するために、抑え技からスタートした。投げ技については、安全や生徒の興味・関心を考え、足技をはじめに学習し、腰技や手技に発展させるようにした。对人的技能の特性を考え、動きながらそれぞれの技を自由にかけられることを目標とした。ただし、払い技については移動しながらのタイミングが、かなり重要なポイント

になってくるので、3年生で取り扱うことにした。

連続変化技については、特に2・3年生で学習することにしたが、1年生においても抑え技から他の技への変化、投げ技から抑え技・同一技の連続がけなどの、技をつなぐ大切さを指導した。

④ 学習過程の工夫

授業を展開していくうえで、生徒が意欲的に学習に取り組むためには、個々の技能の学習過程に重点を置くべきであると考え、自己の能力をためす、自己技能の伸長に主眼を置き学習過程を構成した。

ア. 班編制の工夫

身長・体重を考慮し、各学級を重量級・中量級・中軽量級・軽量級の4つの班に分けた。初めて中学校で柔道を学ぶ生徒は、技能そのものよりも、体力差によって学習意欲をそぎやすいからである。さらに技能の定着をはかるためには、投げやすいこと、上手に投げられることが大切であると思われる。このことは技がかかった時の喜び・満足感が技能の伸長には欠くことができないと考えられる。また少人数によるグループは相互指導に適し、互いに技をたしかめあいながら、練習や話し合いを進め、活気ある学習が展開される。技能のやや劣る生徒に対する指導や配慮もなされやすい。

イ. 一斉指導と班別学習

当初、1つの技能を1時間扱いで指導してきたが、どうしても技能が定着しにくいという悩みにぶつかった。班別学習は以前から実施してきたが、生徒が主体的に課題を解決するには、時間が不足し、技をかけるという楽しさを味わうにいたらなかった。そこで1時間目には、教師が技のポイントを中心とした一斉指導の授業を展開し、2時間目には、班別学習により相互に技を確認しあうことを中心に学習過程を構成した。さらに相互の技の確認を、上手に投げられれば「一本」・それに近ければ「技有り」・技が理解されていなければ「有効」と審判の方法で判定することにした。このことは誰もが審判ができるうえで効果的な学習となった。

⑤ 自己評価と級判定

自己の技能の伸長を図るには、目標の明確化が大切であると考え、そこで到達度段階を設定し、生徒自身に目安をあたえることにした。

到達度段階は、柔道級位審査基準に照らし級位を認めることで生徒の励みとした。生徒は、判定基準にそって自己評価をすることとした。到達度はあまり細かくせず、基本的技能を中心に10級に分け、それぞれが5段階で評価できるようにした。自己評価を級判定の基準に合わせることで、自己の課題を明らかにし、3年間の技能向上過程が一目でわかるようにした。

級の審査は、①教師による評価と、生徒の自己評価を参考にし、各学年スキルテストを行う時に同時に実施し判定する。合格者には柔道級位認定証を授与する。②3年間の継続の級とし3年生での1級を最高級とする。各地区柔道連盟の段・級位は、そのものとする。③校内における柔道大会で優秀な成績をあげた生徒には、特別昇級を認めることとした。さらに生徒の感想欄と、教師からの一言を入れ、反省と次年度への課題とした。

4. 実践の成果

本校での教科体育としての柔道指導の取組みは8年間になる。当時は量を含めた授業環境は生徒状況と合せて大変困難な条件下にあった。そんな中で、年次計画を立てた量の購入や“道”としての柔道の指導を通して生徒の生活改善を図り、徐々にではあるが着実に指導・実践をする中で成果をあげてきた。

昭和61年度より3年間、文部省格技(柔道)指導推進校として指定を受ける機会に、教科体育では今までの実践の上にたち、研究を進めていくことは勿論、教科体育のみに関わることなく、健全育成に資することがより効果を高めることをねらい、他領域との関連、つまり道徳・特別活動・教科の全域にわたり実践することが望ましいとの共通理解の下に研究を進めてきた。以下その実践についてまとめてみたい。

(1) 教科体育について

- ア. 保健体育科教諭が技術講習会へ積極的に参加したことにより、指導者自身に指導力の向上・技術の向上がみられ、柔道指導の内容の充実が図れた。
- イ. 相互指導による班別学習を充実させたことにより、技が以前に比べて定着するようになった。さらに、生徒の学習意欲も活発になってきた。
- ウ. 1技能2時間扱いとしたことで、班別学習に十分時間がとれるようになり充実してきた。それにより、やや技能の劣る生徒に対して、配慮がなされるようになり、協力・助け合いといった思いやりの心をもつようになってきた。
- エ. 格技指導をきっかけとして、学校生活における礼儀・作法に関する指導が徹底しやすくなり、生徒も素直に受け入れる態度が見られるようになった。
- オ. 生徒会を中心とした挨拶運動の取組みにより、心のこもった挨拶が全校的に、又、男女を問わずにきちんとできる傾向がみえてきた。
- カ. 道徳指導との関連と思われるが、体力的に強い生徒が、弱い生徒に対して思いやりのある行動がみられるようになった。
- キ. 柔道指導の授業研究の実施により、指導方法の工夫・改善がみられるようになった。
- ク. 冬季の学習ということで、準備運動・補強運動そして補助運動の一連の流れを作り、からだを十分にあたため、さらに固め技から授業に入ることで「寒い」とか「痛い」という意識を和らげることができ、ケガ等も少なくなった。

(2) 道徳教育との関連について

- ア. 「道徳領域との有機的関連を通して心の育成を図る」を目標として実践した。
- イ. 今年度の重点主題である「生命の尊重」、「思いやりの心」、「強い意志」、「ゆたかな心」「人間愛」等の主題が柔道の実践場面と合わせて、その深化が図れた。
- ウ. 授業研究の実施により、指導方法の工夫が見られ、生徒の内面にせまることができたと思われる。
- エ. 道徳の授業が、比較的計画にそって指導・実践できた。

(3) 特別活動との関連について

- ア. 「学級指導における仲間意識の育成と安全教育」を目標として実践した。

- イ. 具体的な取組みとして、「社会性の育成」をめざす重点目標が、学級指導を通して各学級にその成果が見られるようになった。
- ウ. 学校行事への取組みは、各学年、自主的・積極的になされ大きな成果がみられた。
- エ. 学級委員会・体育委員会を中心として、校内柔道大会の運営・実施が定着してきた。
- オ. 学校行事等により、仲間意識の自覚がみられた。

5. 今後の課題

研究指定校として年次計画に基づき、本年度は特に教科体育の面と、他領域との関連を中心として、格技指導のみにとらわれることなく全校体制で研究を進めることができた。そのため多くの研修の場を持つことができ、到達目標の明確化・指導方法の研究等、各組織への積極的な働きかけを心がけ、さらに健全育成の目標に多少なりとも迫ることができたと考えている。

(1) 教科体育について

- ア. 格技指導の実施時期について、より多くの効果を高める時期を再検討したい。
- イ. 安全指導・安全管理について、指導者自身の研修をより深めることを痛感した。
- ウ. 施設・設備面での改善を一層図りたい。

(2) 道徳指導との関連について

この研究をきっかけとして、今後更に継続的に研究し、生徒への内面化と合せて実践化に迫る道徳教育をめざしていきたい。

(3) 特別活動との関連について

学級指導を通して、社会性の育成、愛校心の育成、魅力ある学校づくりをより図れるよう努力したい。

上記の課題をふまえ、今後も生徒一人一人のもつ個性・能力を大切に、格技（柔道）の振興と、自らにとってかけがえのない学校として、こよなく愛することのできる生徒の育成をめざしたい。

一人一人が意欲的に取り組み、確かな技能の向上をめざす 学習指導の展開

— 教育機器の活用を通して —



宮崎県宮崎市立宮崎西中学校
校長 塩月良一



学級数 30
生徒数 1204名
保健体育科 教諭 池田徳雄

〒880 宮崎市原町1-4 ☎0985-24-2646

1. 主題設定の理由

本校では、生徒一人一人の学習意欲の向上を図り、自主学習の気風を育てるために、学年毎の発達段階を考慮した学業指導の実践研究を行うとともに、基礎的・基本的な能力の定着を図るために、達成度評価の考え方を導入し、単元レベルでの目標分析、観点別評価基準、指導計画、各時間毎の指導細案を共同で作成して授業で検索し、さらにその結果をもとにして改善案の検討を重ねてきた。これらの目標分析・授業設計・評価の研究の教育工学的手法をふまえ、さらに学習指導過程の中で教育機器を有効に活用し、学習指導の最適化・効率化を図ることとした。このことが、生徒一人一人が学習のめあてをしっかりとつかみ、それを追求する学習の仕方・方法を体得し、興味をもって意欲的に学習に取り組むようになると思う。

保健体育科では、「器械運動」を中心として「一人一人が意欲的に取り組み、確かな技能の向上をめざす学習指導の展開」について研究を重ねてきた。器械運動は、「できる」「できない」がはっきりしているので、生徒の「好き・嫌い」が著しくあらわれる教材で、指導の難しさと生徒の取り組みの消極さが目立つ教材である。そこで、器械運動そのものもつ楽しさを味わわせるためには、一人一人がいかに積極的に、しかも意欲的に学習に取り組んでいるか、また、その姿はいかにも楽しそうで、みんなと仲良く、協力しながら学習の主役として活動しているかが大きなポイントとなる。特に教育機器の効果的活用によって「器械運動」が意欲的に、しかも楽しい教材として生徒たちに学習されるよう主題を設定した。

2. 研究の仮説

- (1) 確かな技能の向上をめざすために、目標分析による目標の明確化や観点別評価基準の設定等教育工学的手法を通して授業設計を行えば、一人一人の生徒に、基礎的・基本的な技能の向上を図ることができるのではないか。
- (2) 生徒一人一人が、自主的・意欲的に学習に取り組むために、教育機器を効果的に活用した学習指導過程を組み立てていけば、学習指導の最適化・効率化が図られるのではないか。

3. 研究内容

(1) 目標分析とその手法

一人一人が意欲的に学習に取り組むためには、保健体育科の目標や研究領域である器械運動の目標を明確にして、その達成目標を具体的に設定し、評価の観点を明確にすることが大切となってくる

る。

- ① 指導項目の設定 → 生徒の実態を把握して設定する。
- ② 年間指導計画と時間配当 → 生徒の発達段階に応じ、年間計画を立て時間配当をする。
- ③ 達成目標の設定 → 生徒が達成すべき基本的行動を設定する。
- ④ 達成目標の観点 → 観点別に達成目標を分析した学習要素を一覧表に記入する。

(器械運動) 目標分析表

教材	指導項目	達成目標	達成目標の観点		
			運動の技能	知識・理解	関心・態度
運動の技能・知識理解	• わざの組合せを工夫したマット運動	<ul style="list-style-type: none"> • 各種の回転運動や姿勢保持の運動の技能を高める。 • 跳躍力、支持力、身体支配の能力の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ いまできるわざを使って3～4のわざが連続してできる。 ○ 新しい回転わざを1つ身につけて3～4のわざが連続してできる。 ○ 新しいわざを1つ身につけて、動的な動きや静的な動きをとり入れて3～4のわざが連続してできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各種の回転運動や姿勢保持の運動を系統的に体系づけ理解できる。 ○ 習得した運動を変化させたり、連続したり、組合せ方の手順が理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 器械運動に興味・関心がある。 ○ ねらいに応じた各種運動をつくろうとする態度がみられる。 ○ ねらいに応じた各種運動を正確に、真剣に行おうとする態度がみられる。 ○ 各種の運動を根気強くいい運動の熟練性を高めようとする態度がみられる。 ○ 個人やグループで組合せを工夫したり、跳び方を工夫する態度がみられる。
	• 跳び方を工夫した跳び箱運動	<ul style="list-style-type: none"> • いろいろな跳び越しの技能を養う。 • 跳躍力を高めるとともに脚—腕の協応性や身体支配の能力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ とび箱の高さや置き方、あるいは着手位置、空中姿勢などをかえて跳び越しができる。 ○ 助走—踏切り—着手—空中フォーム—着地の一連の動作に変化をつけて、スムーズに行うことができる。(大きな動作) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各種の運動をさらに雄大な動きに変化、発展させるための基本的な動きが理解できる。 ○ いろいろな運動を通して、跳躍力を高めとび箱のおもしろさを理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話し合いに積極的に参加し、互いに協力して助け合い、励まし合って学習しようとする態度がみられる。 ○ 個人やグループでつくった器械運動を観察しようとする態度がみられる。 ○ 自己の動きや他人の動きを観察し、成功の喜びや組合せを工夫する楽しさを経験し、互いに協力したり、助言できるような自主的、協力的態度がみられる。 ○ 自他の安全に留意して練習できる態度や自分の健康状態に応じ無理なく運動できる態度がみられる。
	• わざの組合せを工夫した鉄棒運動	<ul style="list-style-type: none"> • 懸垂や支持の能力を高める。 • 縦垂運動や支持回転の技能を養い、空間での身体支配の能力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ いまできるわざを使って上がり、回転、下りの三つの要素の運動を連続的に行ったり、同じ運動を一定回数反復してできる。 ○ 新しい回転わざを1つ身につけて連続して、最も簡単な連続から複雑な連続へと発展させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動の一部を変化させて、他の運動と組合せることができるように組合せ方の手順が理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話し合いに積極的に参加し、互いに協力して助け合い、励まし合って学習しようとする態度がみられる。 ○ 個人やグループでつくった器械運動を観察しようとする態度がみられる。 ○ 自己の動きや他人の動きを観察し、成功の喜びや組合せを工夫する楽しさを経験し、互いに協力したり、助言できるような自主的、協力的態度がみられる。 ○ 自他の安全に留意して練習できる態度や自分の健康状態に応じ無理なく運動できる態度がみられる。
	• わざの組合せを工夫した平均台運動	<ul style="list-style-type: none"> • 各種の移動方法やバランス、回転の運動の技能を養う。 • いろいろな運動の連続を工夫して台上を往復することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体をリズムカルに支えたり、回したり、曲げ伸ばしなどの運動や歩行、走行、跳躍運動などができる。 ○ いろいろな上り方、下り方、移動、バランスステップを組合せ連続して、台上を往復(1～2往復)することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各種の運動「歩、走、跳」、「ターン」、「ポーズ」について基本的な動きが理解できる。 ○ 基本的な運動を質の高い動きに変化、発展させるためのポイントを理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話し合いに積極的に参加し、互いに協力して助け合い、励まし合って学習しようとする態度がみられる。 ○ 個人やグループでつくった器械運動を観察しようとする態度がみられる。 ○ 自己の動きや他人の動きを観察し、成功の喜びや組合せを工夫する楽しさを経験し、互いに協力したり、助言できるような自主的、協力的態度がみられる。 ○ 自他の安全に留意して練習できる態度や自分の健康状態に応じ無理なく運動できる態度がみられる。
	• 器械、器具の安全や清潔に留意	<ul style="list-style-type: none"> • 器械、器具の安全を確かめたり、安全に使ったり、清潔に保ったりなどして運動ができる態度を養う。 		<ul style="list-style-type: none"> ○ 正しい用具の取り扱いや補助法を理解することができる。 	

(2) 評価基準設定

観点	単元	指導項目	基本的指導事項	評価の具体的な観点		評価法
				(一)	(十)	
運動	マット運動	<ul style="list-style-type: none"> • わざの組み合わせを工夫した運動 	<ul style="list-style-type: none"> ○ いままでのわざを組み合わせ、2～3のわざの連続ができる。 ○ 新しい回転わざを1つ身につけて、2～3つまでの連続ができる。 ○ 自分でできる動的な動きや静的な動きを1つ身につけて、2～3のわざの連続ができる。 ○ 1つの回転運動や姿勢保持の運動を系統的に体系づけができる。 ○ 自分でできるわざをどのように組み合わせたらよいかを考えること。 	<ul style="list-style-type: none"> • いままでのわざを組み合わせ、3～4のわざの連続がスムーズにできる。 • 新しい回転わざを1つ身につけて、3～4のわざの連続がスムーズにできる。 • 動的な動きや静的な動きを1つ身につけて、動的な動きや静的な動きを取り入れて3～4のわざの連続がスムーズにできる。 • 各種の回転運動や姿勢保持の運動を系統的に体系づけがスムーズに理解できる。 • 習得した運動を変化させたり、連続したり組み合わせ方の手順を十分理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観察 	
運動	跳び箱	<ul style="list-style-type: none"> • 跳び箱を工夫した跳び箱運動 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 低い跳び箱とぶよや、置き方を変えての跳び越しができる。 ○ 低い跳び箱で、助走一踏み切り一着手一空中フォーム一着地の一連の動作を考えた、行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 跳び箱の高さや置き方、あるいは着手位置、空中姿勢などをかえての跳び越しがスムーズにできる。 • 助走一踏み切り一着手一空中フォーム一着地の一連の動作に変化をつけて行うことがなるとかできる。 • 各種の運動をさらに様々な動きに変化、発展させるための基本的な動きがなるとか理解できる。 • いろいろな運動を通して、跳躍力を高め、跳び箱のおもしろさがなるとか理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観察 ○ 挙手 	
運動	鉄棒運動	<ul style="list-style-type: none"> • わざの組み合わせを工夫した鉄棒運動 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分でできるわざを使って、上がり、下りの2つの要素の運動をくり返し行うことができる。 ○ 自分でできるわざを一定回数回復して行うことができる。 ○ 自分でできるわざを1つ身につけて連続して最も簡単な連続わざから複雑な連続へ発展させるための基本的な動きがなるとか理解できる。 ○ 自分でできるわざを1つ身につけて、何回もくり返して行うことができる。 ○ 自分でできるわざを1つ身につけて、他の運動の一部を変化させて、他の運動と組み合わせることができるようにするための手順を理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 跳び箱の高さや置き方、あるいは着手位置、空中姿勢などをかえての跳び越しがスムーズにできる。 • 助走一踏み切り一着手一空中フォーム一着地の一連の動作に変化をつけて行うことがなるとかできる。 • 各種の運動をさらに様々な動きに変化、発展させるための基本的な動きがなるとか理解できる。 • いろいろな運動を通して、跳躍力を高め、跳び箱のおもしろさがなるとか理解できる。 • 跳び箱のおもしろさがなるとか理解できる。 • いままでのわざを使って上がり、回転、下りの3つの要素の運動を系統的に行うことがなるとか理解できる。 • 同じ運動を一定回数回復して行うことがなるとかできる。 • 新しい回転わざを1つ身につけて連続して最も簡単な連続わざから複雑な連続へ発展させることがスムーズに理解できる。 • 運動の一部を変化させて、他の運動と組み合わせることができるようにするための手順の理解がなるとかできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観察 ○ 挙手 	
安全	平均台運動	<ul style="list-style-type: none"> • わざの組み合わせを工夫した平均台運動 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平均台に上ることや、走、歩、跳などができる。 ○ 自分でできる上りや下り方の練習をし、台上で最低1～2パルプ、ステップを組み合わせて、往復することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 身体をリズムミカルに支えたり、回したり、曲げ伸ばしたりの運動や歩行、走行、跳躍運動 • いろいろな上り方、下り方、移動、バランス、ステップを組み合わせて連続して、台上を(1～2往復)することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 挙手 ○ 観察 	

(3) 年間指導計画の作成

領域別に作成し、見やすく指導しやすいものとして、機器を活用することによって授業の効率化最適化をはかるためにメディア欄を設けてチェックできるようにしておく。VTRを中心にVD、OHPの活用をはかる。

(4) 授業研究と指導法の改善

「できる」「できない」がはっきりしている器械運動で「精一杯がんばれば、手が届きそうだと思う課題を決めておいて、自分の最善の努力・工夫によって達成してやるんだ」という経験をすべての生徒に提供し、楽しい学習と運動の楽しさや喜びを学びとる学習をすすめていくことによって一人一人が意欲的に取り組み、成果もあがるという観点から授業研究を推進してきた。

① 流れ指導案の作成

各学年男女別に流れ指導案を作成し、学習の効率化・最適化をはかる。

② 授業改善視点表の作成

授業研究をより効果的にし、授業改善の具体的資料として活用をはかる。

③ 生徒による授業の感想

生徒が意欲的に学習に取り組み、確かな技能の向上をめざすためには、教師の力量や創意工夫によるところが大きい。授業に対する生徒の感想は、指導法の改善に役立つよう項目を精選し、活用をはかる。

④ 教育機器の活用

VTRやVDを活用して授業の最適化をはかり、生徒一人一人の意欲を喚起しながら目標達成をはかる。授業研究の客観的資料としても最適で、指導法の改善資料として活用していく。特に、自作教材においては、作品そのものの価値だけでなく、自作の過程において得られる関連的な教育的価値を大切にす。

⑤ 基本的学習訓練

保健体育科としての基本的学習訓練表を作成し、共通指導を行う。

(5) 学習指導案

第三学年男子器械運動（マット運動）～5／6時の学習指導

① 目標

新しい技を1つ身につけ、動的・静的な動きをとりいれて、3～4の技を連続してできる。

② 細目標

- 本時の課題を理解して説明ができる。
- 本時の学習内容がわかり、行うことができる。
- 今できる技を確かめることができ、行うことができる。
- 自分でできる技を使って、連続技を工夫し行うことができる。
- 今できる技に、さらに1つ新しい技を取り入れて連続技ができる。
- 連続技に、動的・静的な動きをとりいれて、工夫しながら行うことができる。
- みんなで協力して、完全に行うことができる。

③ 学習指導課程

学習段階	時間 (分)	学習内容及び活動	指導上の留意点	評価	資料・準備
話し合い	10	1. 準備運動をする (グループごと) ・ランニング ・補強運動 2. 本時の学習目標・内容を知る ・集合、あいさつ、健康観察、 出欠確認 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 新しい技を1つ身につけて 動的、静的な動きをとりい れて、3～4の技が連続し ている。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 個々の運動を正しく行わせる。 音楽をとりいれ、雰囲気をもりあげさせる。 見学生の指示を行う。 本時の目標、内容を一人ひとりにつかませる。 VTR等を利用し、各自の課題を明確にさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> リーダーを中心に、協力して運動しているか。(観察) 学習内容が確認できたか。(挙手・発表) 	<ul style="list-style-type: none"> マット 黒板(移動) VTR TV VHD OHP
試行	30	3. 各グループで課題を確認し試行する。 ・自己の課題を確認し、課題の試行をする。 ・自分の技能の程度を知り、問題をつかむ。 <例> ・前転一側方倒立回転一伸しつ前転 ・とびこみ前転一前転一開脚前転一前転 ・倒立一前転一とびこみ前転一開脚前転 ・前方倒立回転とびーバランス一助走一とびこみ前転	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに各自の課題を確認させる。 練習についての問題点をつかませる。 新しい技に動的・静的な動きを取り入れながら、連続技を工夫させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 新しい技をとりいれているか。(観察) 動的・静的な動きを取り入れた連続技の工夫ができていないか。(観察) 	
相互練習		4. 試行の結果を話し合い、相互練習をする。 ・くり返し練習をして、お互い観察しながら助言し合う。	<ul style="list-style-type: none"> VTR等を視聴させ、練習を行い、動きのイメージをとらえさせ、技の修正をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の力で連続技を楽しんでいるか。(観察) 	<ul style="list-style-type: none"> カメラ VTR VHD
まとめ	10	5. 学習成果の確認と反省をする ※ ポストテストを行う 6. 整理運動をする。 ・各グループごとに体の各部位をほぐしながら運動を大きく行う。 7. 本時のまとめと、次時の学習内容を知る。	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに発表させ、各自の課題が解決できたか話し合わせる。 リラックスして運動をさせる。 グループごとに話し合いの内容を発表させる。 次時に向けて問題意識をもたせる。 用具の後始末を協力して行わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> みんなで協力して技の改善に努めることができたか。(挙手) みんなと協力して安全に行うことができたか。(挙手) 	
※ ポストテスト (挙手・発表)		1. 連続のつながりがうまくできましたか。 2. 連続技に動的・静的な動きをとりいれることができましたか。 3. みんなと協力して課題解決ができましたか。			

4. 研究のまとめ

- 目標分析による目標の明確化や観点別評価基準の設定等教育工学的手法を通して、授業設計を行うことにより、一人一人の生徒は、各自の能力に応じたためあてを設定し、基礎的・基本的な技能の向上をはかることができた。
- 教育機器(VTR・VD)の効果的活用をはかりながら、器械運動の楽しさや喜びを追求する学習過程を工夫してきたので、一人一人の生徒が意欲的に学習に取り組むようになってきた。
- 器械運動に対する興味・関心や、各種運動をつくらうとする態度、運動の熟練性を高めようとする態度、安全にみんなで協力し助け合いながら学習しようとする態度、個人やグループでつくった技を観察しようとする態度等、情意面の評価(反省)を取り入れることにより、一人一人の生徒が活発に学習に取り組むようになってきた。

(功労者の提言)

私とスポーツ



広島市立天満小学校 校長

益 英雄

自宅 〒730 広島市立中区光南二丁目3-3 ☎082-245-1975

このたび、不勉強な私がいもよらぬ、全国保健体育功労賞を受賞し、誠にありがたく感謝し、恐縮いたしているしだいです。

小学校時代から体育は大変好きな方でした。今ではもっぱら観戦する方ですが、私とスポーツの出会い、終戦後間もない昭和22年、中学3年生の時からです。食糧難、物資不足の時代にバスケットクラブに入学し、中学・高校・大学で先輩や同僚をとおして、技術はもとよりチームワークがいかに大切かを学びました。学校運営にあたっては教師間のチームワークの大切さを痛感しております。

大学卒業後、社会科の教師として小学校に赴任しましたが、スポーツをしていたということだけで無理やり体育主任にまわされたものです。体育指導において児童を鍛えることはもちろんですが、「運動好きな子」「スポーツ好きな子」になってくれることを念頭に教科体育を考え、企画・立案をしました。

高令化社会を迎え、生涯体育が叫ばれている今日、自分から進んで運動・スポーツに取り組む子どもを育成することが何よりも必要だと思えます。毎日の授業で喜々として運動に取り組んでいる児童の姿を校長室でながめながら、子ども達の健康と幸せを願っている者です。



経験から得た「長寿」への道

豊中市立原田小学校 校長

吉 岡 慧

自宅 〒560 豊中市栗ヶ丘町16-4 ☎06-854-7837

「スポーツが好きになる」ということは、生涯の健康づくりと結びついていることは言うまでもない。私が、「体育」を愛し、体育を中核にした人格の形成をめざした指導に力点をおくことができ、自分もあらゆるスポーツに目を向け、上手とはいえないが、スポーツを楽しむことができ幸せである。

それと同時に、食生活の改善である。今は、飽食の時代、食生活を放棄した放食の時代と考えられる。食塩・砂糖・油・肉を少なくし、間食を止め、6時間の熟睡を取り、ストレスはカラオケで解消し、適量なアルコールは百薬の長と考え、毎日飲まないようにする。そして、職場でも、家庭でも体をこまめに動かして血液の循環を良くし、「気のめぐり」を良くするよう心がけるようにする。

言うことはやすいが、持続することはむづかしい。しかし、努力することを忘れない毎日である。特に、体育を愛するものこそ、「長寿」を保つ心身に育っていかなくてはならないと考えている。

このことは、38才の頃より、10年間、大阪教育大学教授・安藤格先生を指導者に頂いて、市内小学校の4年生以上を対象に「肥満児特別訓練学舎」で得た、貴い経験からである。これこそ、体育を愛したのものとしての恩恵であり、生涯スポーツを身をもって実践していけたらと思っている。

生涯スポーツをめざす新しい学校体育を 求める千葉大会のご案内



平成元年度第28回全国学校体育研究大会

千葉県実行委員会会長

鈴木 純也

千葉県立君津高等学校校長

新しい時代の幕開けと云われる平成元年、第28回全国学校体育研究大会千葉大会が開催される運びとなりました。時あたかも、新学習指導要領が告示され、各地で講習会が開催されている現在、まことに時宣を得たものと存じ、充実した大会となることを心より念願しております。

昨年6月、日本学校体育研究連合会長宛、大会開催受託の文書を発送以来1年4ヶ月、千葉県学校体育研究連合会の組織を総動員し、多くの人達が公務の傍ら精力的に東奔西走してそれぞれの分野において滅私の準備に取り組みました。加えて、千葉県教育委員会、関係各市の教育委員会の心暖まるご理解とご協力を得、日本学校体育研究連合会の会長をはじめとする役員並びに事務局の皆様のご懇意なご指導ご激励を戴きながら今日に至りました。改めて心より御礼申しあげます。全国各地よりご参集の皆様方に、なるべく多くの貴重なお土産をお持ち帰りいただけるよう、さらに、最後の仕上げに鋭意努力中であり、短時日の準備で至らぬ点もあろうかと存じますが、真摯な努力をご理解いただき、ひとりでも多くのご参加をお願い申しあげる次第であります。

趣 旨

次代を担う幼児・児童・生徒1人ひとりの個性を生かした学校体育の在り方について、授業公開・研究発表・研究協議等を行い、今後の学校体育の充実に資する。

研究主題

自ら運動に親しみ、豊かな心と健やかな体を育て、生涯スポーツをめざす新しい学校体育を求めて

期 日

平成元年11月9日(木)・10日(金)

会 場

第1日 全体会 千葉県文化会館 千葉市

第2日 分科会

幼稚園 津田沼市1会場 千葉市2・市原市1・船橋市1

小学校 習志野市1・八千代市1 浦安市1会場

中学校 千葉市2・市川市1会場

高等学校 千葉市2会場

特殊諸学校 君津市1会場

※詳細については下記にお問い合わせください。

〒276 千葉県八千代市勝田台南1-1-1 県立八千代高等学校内

千葉県実行委員会事務局 Tel 0474-86-3385

※第1日 全体会では「新学習指導要領と体育指導」について、文部省担当官の解説を予定しています。大変有益な解説をいただけるものと思いますのでどうぞご期待ください。また、「生涯スポーツと学校体育」の演題にて、昭和女子大学 外山滋比古教授の講演も予定されています。将来を展望した学校体育の在り方について示唆に富む講演を期待しております。尚、アトラクションとして「なのはな体操」・「太極拳」・「佐原ばやし」を用意してあります。ご観賞ください。

※第2日 14分科会場に分かれ公開授業・研究発表・研究協議が予定されていますが、活発なご意見を頂戴して大会を盛りあげていただきたいと願っています。また、指導助言とともに新学習指導要領の分野に踏み込んだ講評もいただけるものと、大いに期待されます。

※ご案内

1. 都道府県代表者会議 11月8日(水)14時 千葉県文化会館
2. 全国理事評議員会 11月9日(木)15時45分 千葉県文化会館

千葉県は、第1回大会を開催した名誉ある県であります。当時と比較しますと新東京国際空港・第1回生涯学習フェスティバルの開催される幕張メッセの完成、東京湾横断道路の着工等躍進著しい県であり、また、三方海に囲まれ自然の豊かな県でもあります。現在、千葉県を訪れた人々に、心温く思いやりのあるサービスをしようと“さわやかハート千葉”県民運動を展開中であります。大会終了後、千葉県の風土と県民の心に接していただければ大変有難く存じます。全国津々浦々から沢山のご参加を心よりお待ちしております。千葉大会のご案内とさせていただきます。

あ と が き

学体連が出している「学校体育研究」という機関誌は、僅か3000部、40ページ足らずのものを年に1回だけ出している。会報は8～16ページ、年に2回、1回につき41,500部、全国の公立小中高校に1部ずつ行きわたるように送っている。

一生懸命書いて頂き、それぞれの先生に読んで頂こうと書いて下さる先生のお気持ちを考えると、何とかよい反応があって欲しいと願う。

大石会長には毎回執筆をお願いしているのであるが、割合すらすらと書けたなと思える時と、苦悩して容易に上がらない時とがある。日頃色々と考えておられる先生にしてなおこのような状況である。浅田理事長は概して早いのだが、今回はかなり時間がかかったようである。岡先生のは、昨秋、奈良県における講演の抜粋で、ラグビーを通して感じられた先生の教育感、人生観、スポーツ観と言ってよいと思う。

授業研究は小学校3校、中学校2校の執筆を頂いたが、高校がないのが惜しまれる。

功労者の提言は、功労者として表彰された方を選んで僅かのスペースに書いて頂くものであるが、意外にご辞退があって少々残念に思うことがある。私達後輩に対して、具体的なご指導を頂けたら誠に有難いと思うのである。

(重田 一)

祝

第28回全国学校体育研究大会

千葉大会

操守会

つくば国際スポーツセンター

〒305 つくば市大角豆1744

TEL 0298 - 55 - 0333

財団法人 日本学校体育研究連合会

発行日 平成元年（1989年）3月31日

発行者 大石 三四郎

発行所 財団法人 日本学校体育研究連合会

〒151東京都渋谷区代々木神園町3番1号

国立オリンピック記念

青少年総合センター内

☎ 03-465-3954・7464

